会報 松門

No. 21
平成 7. 9. 1

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町２－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

吉田松陰と高杉晋作
―心の交流―

元山口県立山口博物館長
松風会理事　石原啓司

吉田松陰の門弟に対する接し方は、各人の長所と短所を的確に判断し、長所は更に伸ばし、短所に対しては、その反省を求めたことは、松陰の門弟に与えた送叙や書簡に見るとおりである。

高杉晋作に与えた「送高杉暢夫叙」（安政五年七月十八日）は、師松陰が晋作の個性を見抜き、久坂玄瑞と競争させることで、晋作の才能を伸していった姿がよく判る。

吉田松陰と高杉晋作の心の交流は、門弟たちの中でも特別なものがあり、松陰が晋作に大きな期待を持っていたことが判る。

安政六年、江戸獄にあった松陰は、当時江戸にいた晋作に多くの書簡を送っている。

晋作は松陰処刑（十月二十七日）の前、十月十七日に急に藩命により、江戸昌平黌を退学し帰国したが、松陰は晋作の帰国を知り、昔を惜しみ、萩在住の弟子たちの面倒を見ることを晋作に依頼した書簡を送っている。（十月七日付け）

「僕（松陰）この度の災厄、老兄（晋作）在江戸なりしのみにて大いに仕合せ申し候。御厚情厚く感銘仕り候。急の御帰国とあれば残念なり。然れども此の間の様子父兄朋友へ御話下され候はば又喜ぶべし。是望外の大幸なり。」（中略）

「諸友中（門弟たち）小田村大いに進歩。実甫（久坂玄瑞）必ず進境あらん、但し才勝ちて動き易し、能々御添心下さるべく候。弥二・作間（品川弥二郎・作間忠三郎）後進中属望のものなり、鼓舞し絵え。」（後略）

実に正確に門弟の性格を見抜き、晋作にその指導を依頼しているのである。

江戸在獄中の松陰は、七月中旬の晋作あて書簡では「貴問に曰く、丈夫死すべき所如何。僕去冬以来（野山獄再入獄）、死の一字大いに発明あり、李氏焚書の功多し、其の説甚だ永く候へども約して言はば、死は好むべきにも非ず、亦悪むべきも非ず。道尽きて心安んずる、すなわち是れ死所。世に身生きて心死するものあり、身亡びて魂存するものあり、心死すれば生きるも益なし、魂存すれば亡ぶるも損なきなり」

とあるのは、松陰が李卓吾の「焚書」を読み、獄中での彼の死生観に大きな影響を与えたことを示すものである。

なお、松陰は、晋作の死生観に対する質問に対して、続けて次のように語っている。

「死して不朽の見込あらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込あらばいつでも生くべし」

師松陰の死後、六年間に及ぶ高杉晋作の尊攘・討幕運動はジグザグな迷路をたどり、時に逡巡し、時に絶望し、最後の行動に収斂してゆく。

そこには師松陰の蔭が色濃く残されているのである。

生まれも、性格も対照的な二人の行動が妙に重なりあうのは、共に「無償の行為。純粋な魂」があったからであろう。

「功業ではなく忠義をするつもり」と松陰は語っているが、この行動を松陰は「狂」と呼んだのである。

「講孟余話」の最後の二章は松陰の気魄が満ちている文章であるが、そこに「狂」の行動の説明がある。

凡俗の者には、一寸先が読めない混迷の時期に、松陰と晋作が共に自分の行動を「狂挙」とあえて言える歴史を見つめる冷静な目を持っていたのである。

松陰も晋作も藩主毛利敬親に対する忠義を貫きながらも、二人が共に明治維新への道を切り開いた精神こそ、この「狂」の精神であったと言えよう。

第２回　松陰研修塾生（平成６～８在塾）

松陰先生の心の深化統一を遺文に求めて

松陰研究家
松風会理事　三輪稔夫

『吉田松陰全集』（昭和十一年完結の定本版・はとんど漢文）中の遺文は数千点に及ぶ。しかし松陰十五歳（弘化元年）以前の遺文は現存していない。『未忍焚稿』は弘化二年以後、『未焚稿』も同二年以後、『詩文拾遺』は同三年以後である。安政三年二十七歳、杉家幽室にて残稿を整理し、標題が示すように未だ焼くに忍びないものとして残したものである。『未焚稿』は未だ整理できず合綴など雑然となっていたものを昭和十五年完結の普及版から全集編者によって配列された。

一、松陰の元服・志学・字、立志（1）

松陰自身の元服・志学・字に関する遺文は残っていない。わずかに、それも二十五歳（安政元年）、下田踏海の挙に失敗し江戸獄から野山獄に帰る十月二十四日の前夜、明木駅に着き、護送の三人（武弘・岳田・福川）が、松陰の駕籠の傍に来て「引渡し処は野山屋敷福川犀之助云々」と。松陰は重病の同志金子重之助の気の毒な心を励ます意図も含めて、明木橋を過ぐる際、次の五言絶句を朗吟し、その跋文にも触れたに違いない。

少年志す所あり、
柱に題して馬卿を学ぶ。
今日檻輿の返、
是れ吾が昼錦の行

明木橋を過ぐ、橋は萩を去ること二里、余幼時此を過ぎ、戯れに司馬相如の昇仙橋に題する語を題す。今また此を過ぐ、之を思うて慨然たり。

自分は少年時代、この明木橋を渡る時に、司馬相如（前漢、成都の人、字は長卿、官位も栄進し、詩賦にもたけ、後世詩人の憧憬の的であった。）が蜀城の北十里の昇仙橋の柱に、「大丈夫駟馬（四頭立馬車）に乗るにあらざれば再びこの橋を過ぎず」と題書したように、自分も志業成就を期して明木橋を渡った。ところが今日、事志と違い（下田事件を指す。）檻輿（罪人を乗せる駕籠）でこの橋を渡り萩に帰る始末である。しかし、天皇や藩主、日本や藩国のために、一意国防（独立）と開国（貿易）を果す使命の手段として国禁を犯した。自分としてはむしろ、昼間、錦を着て萩に帰る気持ちである。金子よいか、堂々と帰るのだよ。

「柱に題して馬卿を学ぶ」とは、司馬相如が自己人生の理想を示すため自ら長卿と字したことに松陰が学び、松陰も自ら義卿と字したのである。元服・志学・字は十五歳以後ごろ当時の武士は大人になったことの社会的承認を得るためというより、自覚の第一段階とした。

問題は絶句の「少年」と跋文の「幼時」であるが、年譜によれば弘化四年三月周防国湯田（山口市）に遊ぶは明木橋を過ぎている。後に松陰は従弟玉木彦介の字を叔父玉木文之進の許可を受けて彦介十五歳加冠の後与へている。松陰の十五歳は、藩主の親試を受け、『武教全書』及び『孫子・虚実篇』を講じ、『七書直解』を賞として賜わった年である。あるいは親試の直後、明木橋を過ぎ、山口往還や関（赤間関で下関ともある）街道付近に歩を進めたかも知れない。

なぜ松陰の志学や字を問題にするかといえば、中心は何を根処に、何を原典にしたかという点である。義卿は生涯使ったが、二十歳以後一時盛んに用いた字に子義がある。いずれも義を重んずる人のことを示す。松陰は安政三年『講孟余話・尽心下・第八章』の最初に、「余孟子の読を受けてより二十年」とある。年譜によれば、天保六年六歳の時から「叔父玉木文之進より孟子の業を受ける」と。全く符合する。

孟子は孔子の仁を受けついだ仁義の道徳である。孔子の仁は家族の中の肉親間の愛情で、ふさがれてはいるがそこに潜んでいる普遍性を次第に社会・国家に及ぼし、人と人とが親しみあって社会秩序を維持してゆく原理としての仁の徳をうちたてた。元来道徳は、超越者の摂理や命令ではなく、人間の内心の自然性におかれている点が重要である。『講孟余話・告子上、第十一章』には、「仁は人の心なり、義は人の路なり」を取り上げ、義は仁の実践に当って必ずよらなければならない通路であるとこでは示している。しかし、もっとも端的に義の意味をとらえているのは、『同・告子上・第四章』で告子が、「仁は内なり、外に非ざるなり。義は外なり、内に非ざるなり」に対して、松陰は明確に否定し、「支那人は真に義外の非を知らず。故に真に君臣の義を知らず。余を以て是を見るに、仁義同根にして、遇う所に因りて名を異にするのみと。父子には仁と云い、君臣には義と云う。其の実は一心より流出する所なり」と。松陰は最期まで仁義同根であった。

松陰の志学は山鹿流兵学を軸に聖経賢伝を一体にしたものであった。試に孔子の自叙伝を『論語・為政第二』に求める。

十有五にして学を志す。詩経・書経・礼記・楽経。
三十にして立つ。学問の基礎の上に立つ。（立志）とす。
四十にして惑わず。学問に自信、人間生活に妥当。
五十にして天命を知る。文化の為努力が天の与えた使命。
六十にして耳順う。
七十にして心の欲するところに従って矩を踰えず。

孔子の三十にして立つを立志としたのは広い視野から人生に対する志を構築すると考えた私案である。松陰は僅か三十で幕府の判決により処刑。孔子の耳順のごとく。だから松陰は孔子の三十から六十までを、二十歳前から三十歳までの間にすべて実行した。その上生涯学習は瞬時も休むことなく、又魂の教育に心血を注いだ。

これから立志（1）に入るため駄弁を弄した。弘化二年から四

年までの間について述べる。松陰の後見人山田宇右衛門が江戸から帰り偉大な示唆を松陰に与えた。第一は『坤輿図識』（弘化二年版 文化二年版 世界地理書）と世界地図を贈り、世界の情勢から注意を促す。第二は一派の兵学を墨守する時代ではない。長沼流第一人者の山田亦介（元老村田氏 風切）に入門すべきだ。山田は西洋陣法も海防兵制にも長ず、この派の中心書『兵要録』は佐藤寛齊がたけている。その他萩野流砲術などを伝える。後『丙辰幽室文稿』中に松陰は、「僕小少にして門下に親炙し、片言隻辞未だ嘗て正を先生に取らざるはあらず、先生も亦傾倒して遺すなし」と、山田宇右衛門あて書簡に述べている。

早速松陰は山田亦介の門に入り兼学する。山田亦介は養父吉田大助の二歳下で、互いに相切磋し肝胆相照す友であった。養父は藩の儒者の多くが徂徠学を守り往々偏見に傾くを嘆き、宋学を喜んで幕府の専横を憤り、『王覇の弁』一篇を作ったことも聞く。その後継が教を乞うことは山田亦介の最大な喜びであった。更に山田宇右衛門より一層進めて西洋列強の東洋侵略が、スペイン・ポルトガル時代とは格段の威力をもって迫っている。アヘン戦争以後、琉球に、そして長崎にもと松陰に伝える。松陰も、この時局の進展を憂い、萩で入手できる資料を集め『外夷小記』を編み、「秘而蔵」と表紙に書く。

弘化四年、松陰は国難が迫っているにもかかわらず、武士の学問や生活が気になってならない。(A)『平田先生に与える書』と、(B)『寡欲録』とによって、藩内武士の変革に着手しなければならないと思う。

(A)(B)共、論文の趣旨は同じである。今日、武士一般の風潮として漢詩、漢文、書、画を嗜む傾向があり、それができなければ俗輩という。しかし松陰は逆である。

(A)では、「書を読み道を学ぶには其の志を立て」て、心を大きく持ち、小事にこだわらないことだとする。（ここに立志が松陰かと）そして「某独り曰く」を文中四度も書き、学の小事を捨てて、松陰の意図する大事を述べる。まさに松陰の自主性、土性骨を打ち出す。十八歳のこの頑固さこそ松陰を偉大にする根抵であった。

(B)は、「孟子曰く、心を養うは寡欲より善きはなし」と、「周子曰く、これを寡くして無に至る」を思い出し、詩文書画は欲のためであって、陥り易く、悔い難いとする。松陰の学は、「身の職を尽して世用に供するのみ」とし、武は、「君に事へて生を懐はざるのみ」とする。更に、「自ら以て俗輩と同じからずと為すは非なり、当に俗輩と同じかるべからずと為すは是なり。蓋し傲慢と奮激との分なり」と。普通傲慢に対しては謙遜が使用されるが、この場合、松陰自ら学者として、又武士として尽力しようとする意味で適した語句を使って謙遜の意を表わしている。松陰の心は終生謙遜を維持している。謙遜は対人関係として、特に目下の人に対してそうであることが重要であるが、本来、道や真理を相手にする人格的徳である。

二、立志(2)、不惑(1)

山田宇右衛門の説の通りに、その奥義を極めるうちに歳月は流れ、嘉永三年二十一歳から西遊が始まる。平戸に着いて、萩で接することのできない読書と抄録に熱中する。

アヘン戦争関係の『阿芙蓉彙聞』と『聖武記附録』。前書は塩谷宕陰（一八〇九―六七）が、アヘン戦争の真相を清国人の論文から集めた紹介書で、イギリスの東洋進出を詳述した警世の書。後書は、清国魏源の書いた兵書で、古典的兵学を是正する価値あるものである。その中に「夫れ外夷を制馭する者は、必ず先ず夷情を洞う」等、松陰は「佳語」として取り出し、『孫子』の「彼を知り己を知れば、百戦して殆からず」に通じ、後の下田踏海の挙に出るやむを得ない根処となる。

その他アヘン戦争関係と見てもよい『近時海国必読書』にも大いに関心を向ける。

更に一面、『伝習録』を読み陽明学にも研究を進め、「往々にして吾が真と会う」と述べるほどになる。

その上松陰の心の深化に影響を与えた会沢正志齊の『新論』と、先師山鹿素行の『配所残筆』である。『新論』ははじめてであり、水戸学への傾倒が起り、攘夷意識は強まるばかりであった。『配所残筆』は吉田家には伝わっていない。その上この書を読んで、もっと重要な『中朝事実』その他も吉田家にない。幸いにも『配所残筆』中に、『中朝事実』の一要点が書かれていたことである。松陰は後、安政三年八月から、親戚子弟の請に応じ『武教全書』を講じ始め、その開講主意中に、「国恩の事に至りては、先師、満世の俗儒外国を貴み我が邦を賤しむ中に生まれ、独り卓然として異説を排し、上古神聖の道を窮め、中朝事実を撰ばれたる深意を考へ知るべし」とある。

先師山鹿素行の古学は、『論語』を重視し、孔子の黄帝・堯・舜の神話時代が我が国の神代に当り、知仁勇三徳をかねた聖徳の人君一統相続を説く。勇は『孟子』に求める。松陰にとって先師素行は、単なる兵学者ではなく、英雄・豪傑として再現される。ここに松陰の偉大な発展が用意せられた。

東北遊、踏海の最大の根処は、東北遊巻頭の詩である。

頭を挙げて宇宙を観れば、
大道到る処に随う。
明月は今古無く、
白日は華夷同じ。（以下略）

脚注解説　吉田松陰撰集
―人間松陰の生と死―　平成七年十一月刊行

平成「志」考

―松陰からのメッセージ―

山口市立白石小学校長　見好　豊

はじめに

戦後五十年、元号が昭和から平成に改まってはや七年、二十一世紀を担う子供達が平らに成り過ぎないで、自分の存在価値を発揮し、創造的に人生を生きて欲しいと願わずにはおれない。

そこで、今、学校では一人ひとりのよさや可能性をどう伸ばし、自己実現を図っていくか、いわゆる「ナンバーワン教育」から「オンリーワン教育」へ向けての実践に積極的に取り組んでいるところである。

自分の持ち味を出し切って生きるために必要なものは何かを絶えず自覚させ、その実現に向けて己れを尽す若者の育成に驚くべき教育力を発揮した吉田松陰の真骨頂とも言うべき「志」について、平成という時代の窓から考えてみたい。

一、学を言ふは志を主とす

地下鉄サリン事件などオウム真理教をめぐる一連の事件は断じて許されない反社会的事件であるが、同時に、現代の学歴偏重社会へ突きつけられた大きな問いかけであり、鉄槌でもあった。我が子があのような事件に巻込まれなくてよかったと思うと同時に、子を持つ親として当事者である肉親の心中いかばかりかと胸が痛む。「こんな積りで苦労して有名大学に入れたのではない」という悲痛な叫びが聞えてくるような気がする。

冒頭の言葉は講孟余話（梁恵王下首章、滕文公下第九章）に見られる。松陰は学問をするには、何の為に学ぶかという、その志（目的）が一番大切であると言っている。

…正学を崇んで曲学を排するは固よりなり、然れども今茲に一人あり。眞に志を立てて己れを益し人に益せんとの心なれども、偶々（たまたま）正学を知らず曲学を主とする者あらば豈に一概に是れを是とするを得んや。然れば学を言ふは志を主とす。…然れども志を立つること眞ならざれば名は正学なれども実は曲学にも劣るべし。…

正学と曲学の論はしばらくおくとして、人間は何故学問をするのか、特に現代の社会世相を考えて見るとき、何が何でも高学歴、高所得の拝金主義の夢から醒めて「人間の本質的完成のため」という目的を考えよと松陰は我々にメッセージを送る。

…学を言ふは志を主とす。…人は初一念が大切…今、学問を為す者の初一念も種々あり。就中、誠心道を求むるは上なり。名利の為にするは下なり。故に初一念名利の為に初めたる学問は進めば進む程其の弊著はれ……大事に臨み進退據を失ひ、節義を缺き、勢利に屈し、醜態云ふに忍びざるに至る。……

平成の時代を迎えても、何と真実味があり、人間への確かな洞察力を持った指摘であろうか。新聞を開けば、これらの実例には事欠かない昨今である。

司馬遼太郎氏によると、江戸期の身分制は遠い昔になったが現代は、それに代わる秩序として、学歴や出身学校が持込まれている。そして、それに適合しなかったものが、今日、「仮象」（実在するように見えながら、それ自体は実在性をもたぬ形象）の〝身分制〟の各段階に区分されてきていると言う。（「風塵抄」より引用）このような仮象の中で踊らされることこそ滑稽と言うほかないが、この打破は親や子供が、学ぶことの本当の意味をとらえ、時流に流されることのないよう人生の価値判断をして、自分らしく、人間らしく生きることであると松陰の声が聞える。

二、士は以て弘毅ならざるべからず

我が白石小学校の講堂の前面に第二十代校長　三輪稔夫先生の揮毫による扁額が懸けられている。（石碑は講堂の前庭にある）

意　志
克　己
忍　耐
草のようにたくましく
雲のようにおおらかに
輪となろう
光となろう

これは本校百周年（昭和四十七年）を記念して、白石教育の確固たる進路を定めたいとの熱い思いから策定され、現在もゆるがぬ学校目標として継承されてきている。

「意志」、「克己」、「忍耐」は明治からの先輩卒業生が近郊の山から花崗岩を運び出し、釘と金槌で彫りつけた石碑の言葉である。

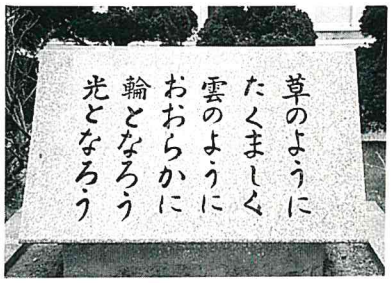
「意志」は人格の中核にあって生き方を決定するものである。自己の真骨頂（個性・存在価値）を自覚させるものである。

松陰は「志を立てて以て万事の源となす」（士規七則）と言っているが、子供一人ひとりが夢や希望を持ち、その実現に向けて志を立て、志を固め、志を持続し、意志にまで高めていくための「志を育てる教育」は今後の教育の成否を左右するキーワードとなろう。

この「意志」の実現をコントロールしていくものが「克己」と「忍耐」である。「克己」は論語　顔淵篇「己に克ちて礼に復るを仁となす。一日己れに克ちて礼に復れば、天下仁に帰す」の克己復礼から出ている。己れに克つにはまず礼儀をわきまえなければならない。

さて、郷土の詩人であり、白石の同窓生でもある和田健さんの協力を得てつくられた碑文「草のようにたくましく　雲のようにおおらかに　輪となろう　光となろう」は、いつ読んでも実に具体的で親しみやすく、美しい言葉である。先見性に富んでおり、味わいのある表現である。こんな人間に育って欲しいという願いが簡潔に表現され、読むものの志気を鼓舞せずにはおかない。

白石小学校百年史によると記念碑除幕式の式辞において、校長は「ここに彫り込んである詩はしっかり読んで暗誦してください。そして家でも学校でも唱えてください。でき得れば学級の皆さんといっしょに声を揃えて朗読してください」と語りかけている。この碑文を平成の「士規七則」として生かしていきたいと願うものである。



（白石教育のシンボル
開校百周年記念碑）

碑文の「たくましさ・おおらかさ」について、松陰は従弟の玉木彦介に自分が最も好む言葉である論語・泰伯篇第七章をもとに「弘、字は毅甫の説」を送って、おもしろい説明をしている。その泰伯篇七章にある言葉が「士は以て弘毅ならざるべからず。」である。

人間はおおらかな情（弘）とたくましい意志（毅）のどちら一つを欠いても大成を果たすことができない。つまり、一人よがりで他者への思いやりのない志は意味をなさないと松陰は言う。

…弘にして毅ならざるものは鉄牛にして行くべからざるなり。毅にして弘ならざるものは野牛にして羈ぐべからざるなり。……

「輪となろう」、「光となろう」にはおもいやりの心を豊かに広げ、国際的な視野を持ち、何らか世のため、人のために尽そう、光となろうとする現代の子供達の志気をゆさぶらずには置かない響きがある。

石碑の裏面に彫られた「開校百周年にあたり、日本の幹となる人物の育成を誓って、この碑を建立す」の心意気は、正に「松下陋村と雖も誓って神國の幹とならん」の心意気と重なりこの碑文そのものが松陰と化して、我々に示唆に富んださまざまなメッセージを送ってくれる。

三、志定まらば則ち気壮にして匹夫も志を奪うべからず

この言葉は戊午幽室文稿「尾寺新之丞を送る叙」に見られる。おそらく、論語「子罕」篇「子曰く、三軍も帥を奪うべきなり、匹夫も志を奪うべからざるなり」によるものと思われる。

それにつけても松陰を敬愛してやまなかった故安倍晋太郎氏が少数派閥の領袖として総裁選に臨む心境をこの言葉を出典として「志定まりて　気盛んなり」「志定まれり　木刀素振りて初詣」の句に託し、郷土の新聞にその決意表明をされていたことが思い出される。

氏にとっては、正に「死して後已む」の覚悟だったのであろう。

…「且つ夫れ志定まらば則ち気壮にして　匹夫も志を奪うべからず。一士気を奪へば　萬夫も辟易す。」……

子供達は様々に夢を描き、希望をもって生活している。これを志とするならば教育は志を育てる営みである。松陰の師、佐久間象山が学んだ佐藤一斉の言志録に「人を教ふる者、要は須らく其の志を責むべし、聒々として口に騰すとも、益無きなり」と述べ立志が堅固であるかどうかを確かめ、反省させ、激励すべきであると説いている。

しかし、いくら志を責めてもやる気がなければならないし、発奮して実行しなければ意味がない。「夫れ志は気の帥なり、気は体の充なり、夫れ志至れば気次ぐ」（孟子・公孫丑）もので、志と気は一体的なものである。

やる気を出させるエネルギーは何か、松陰は「憤悱」であると言い、佐藤一斉も「憤の一字は、是れ進学の機関なり」として志が発動する根幹としてとらえている。

これらは、論語、述而篇八に「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」からの着想であろう。

「憤」とは火山のように心が膨張し、盛り上がり、今にも爆発しそうな状態、「悱」とは何か言いたくてもうまく言えず、口をもぐもぐさせている状態である。志を育てるには子供達を憤悱させること（意欲をかき立てること）がまず先決と松陰は我々にメッセージを送る。

四、汝が素志遠大なり

この言葉は松陰のものではない。父、杉百合之助が松陰に送ったものである。松陰二十二歳の江戸留学中、東北亡命を企て二十三歳の暮、浪人の身となった時、父百合之助は松陰の行為を責めず

…汝が素志遠大なり。一たび誤っても国に報ゆるに尚時あり。豈勤むべけんや。…

と励まし、安政五年、野山獄へ再入獄の命が下った時も「一時の屈は萬世の伸なり。撃獄何ぞ償まんや。」と松陰に慰めと激励の言葉を送ってやまない。

現代の親にとって反省すべきは、早急な、しかも、よい結果を期待するがあまり子供の成長を待つゆとりに欠けている点である。時には失敗もある。失敗や挫折、挑戦を恐れさせず、平らに成り過ぎないようにするためには、親が子供に絶対の信頼を寄せて、子供の成長を期待をもって待つ心が、子供の志を育てる上からも大切ではないかと松陰とその家族は平成の親たちにメッセージを送る。

松陰先生と畿内

山口県立華陵高等学校　伊藤敦夫

一　はじめに

嘉永六年（一八五三、癸丑年間）という年は、東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦を率いて浦賀に来航し（六月）、ロシア使節プゥチャーチンも長崎を訪れ、まさにわが国の太平の眠りをさますこととなった。その結果、幕府内の路線対立に拍車がかかり、対外政策にも行き詰まり、「内憂外患」の閉塞状況におかれることになった。

この年、松陰先生（以下、松陰と記述）は、前年の「十ケ年の諸国遊学願」が藩主・毛利敬親に認められ、一月末に江戸に向けて出発した。途中、畿内での滞留を経て、江戸でペリー来航を知り、秋には佐久間象山の勧めもあり、ロシア艦で密航をすべく長崎に向かっている。

本稿では、松陰の行動記事（著述）が少ないとされている「畿内遊歴」（嘉永六年）を取り上げ、遊歴記録からその意義を探りたい。

兵学者松陰は、すでに嘉永三年の九州遊歴、同四年から五年の江戸ならびに東北への遊学において、大いに見聞を広めている。その成果は、先哲の治績を学びながら同志の結合の必要性を体得し、ひいては水戸の学風に直接触れたことにある。この間、宮部鼎蔵・江幡五郎との信義を大切にしたがゆえ、東北遊歴（用猛第一回）の罪で帰藩命令を受け、嘉永五年五月から約半年間、蟄居謹慎となる。

松陰の行動の自由は、嘉永六年の萩からの二度の江戸遊学出発（一回目：一月出発、二回目：十一月出発）が最後となり、翌安政元年（一八五四）三月の下田踏海事件をもって終了する。

二　『癸丑遊歴日録』から

この年の最初の「畿内遊歴」は、『癸丑遊歴日録』と関係書簡に記されている。江戸東上の途中、松陰は二月半ばの大阪着から五月半ばの桑名出発まで、約三ケ月の間畿内に滞在したことになる。（略表・略図参照）

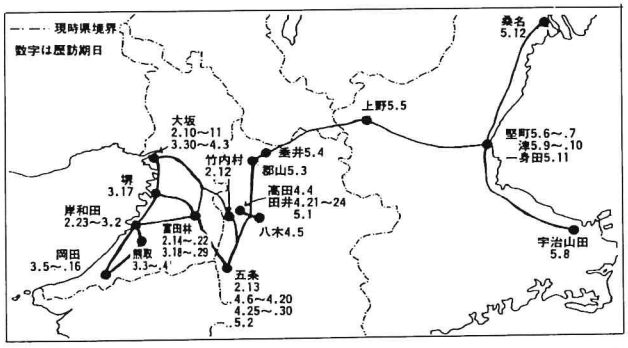
畿内を訪ねた理由は、例えば藩主に随行した最初の江戸遊学（嘉永四年）では時間的余裕がなかったこと、また江戸で知り合った諸同志の結合を畿内でも求めたかったことなどがあげられる。加えて、東北遊歴で知り合った江幡五郎の師匠森田節斎や、さらに節斎が兄事した谷三山らが畿内在住であるため、学びつつ同学の士を求めるという意志の発動が大きい。また、節斎らの教育が自己の信条に整合するか否かの試みでもあった。ともかくも、儒者らの謦咳に接することになる。

およそ、三ケ月に及んだ畿内滞留は、略表のように踏査地域と文士歴訪から、大きく二つの区分がされる。それは、前半においては主として旧河内・和泉国（大阪府）での森田節斎への会見、ならびにその講筵に列なったことである。後半では、主として旧大和国（奈良県）での谷三山との会見、ならびにその門弟森哲之介らとの交流である。この間、松陰は節斎や三山の影響を受けている。節斎については兄梅太郎宛書簡（嘉永六年・四月二十日・抄）に矩方事、文事を治むるに精力

『癸丑遊歴日録』によるおもな畿内足跡

期日	おもな畿内足跡
2.10	大坂着（船内2泊）。
12	竹内村（香芝市当麻町）泊。
13	大和五条(五条市)着。堤孝亭宅で森田節斎に会見する。
14	節斎と、富田林(富田林市)の仲村徳兵衛宅に10日間滞在する。
23	岸和田(岸和田市)の相馬一郎宅を節斎と尋ねる。節斎の講筵に列なり、10日間滞在する。
3.3	熊取（泉南郡熊取町）の中左近を尋ねる。
5	岡田（泉南市岡田）の山田文英を尋ねて、12日間滞在する。
18	前日(17日)に堺(堺市)に着き、増田秀斎らを尋ね、富田林に至る。以後、滞在2日間、動静不明。
30	大坂の南波邦五郎宅に泊まる。
4.1	この日より3日間に、後藤春蔵(松陰)や藤沢昌蔵らを尋ねる(大坂泊)。
4	高田(大和高田市)到着・泊。
5	八木(橿原市八木町)に谷三山を尋ねる。
6	五条に帰り、堤孝亭宅に16日間留宿。節斎に教えを受ける。
21	田井庄(大和高田市)の藤井隆菴宅を訪れ、三山の門人森哲之介と交わる。
25	五条に戻り、滞在6日。節斎の甥のために講義をする。
1	田井の藤井隆菴宅に泊まる。
2	五条の三山を訪う。
3	郡山（大和郡山市）泊。
4	垂井(奈良市樽井町）泊。
5	上野（三重県上野市）泊。
6	堅町(津市)泊まり、翌日斎藤徳太郎らを尋ねる。
8	伊勢神宮で外宮を参拝する。宇治山田(伊勢市)泊。
9	津に戻り、2日間の滞在で斎藤拙堂らを尋ねる。
11	一身田（津市）泊。
12	桑名着。夜半に乗船する。

（　）の地名は現在の行政名



を注がんか、文事を棄絶して専ら韜鈐（兵法のこと）に用いんかと心緒錯乱仕り居り候。と書き残している。また、三山についても、同月末書簡（二十九日・抄）で父（百合之助）・叔父（玉木文之進）・兄に宛てて、

谷三山は天下の奇人と謂ふべし。其の人物森田の文中に略ぼ相見之候。

としている。これら二通の書簡で心情を吐露し、啓発ぶりを示している。尤も、先の書簡（四月二十日・抄）の続きには、

近日断然一決して急に江戸に向ひ、韜鈐を治めんと心定仕り候。

と、東上への初志を貫いている。結果的に江戸到着（五月二十四日）は、時務を自らたぐり寄せることになった。約十日後には、あのペリーの米国艦隊が浦賀に入港してきたのである。松陰はその驚愕ぶりを著述に残しており、畿内で抱きかけた文事への淡い憧景を完全に払拭させている。

三　畿内での志士活動

異国船入港について、早速に兵学者の立場から論じたところに、松陰の真骨頂がある。すなわち、『将及私言』を著し（用猛第二回）、師匠佐久間象山らとその対応を検討している。

松陰は、長崎でロシア艦への乗船案が挫折すると、一旦郷里の萩に帰った。その後、『長崎紀行』の途中に熊本で論談した旧知の宮部鼎蔵と、肥後藩士野口直之允の萩到着を待ち、船便で江戸出発（萩発・十一月二十四日）をしている。この目的は、すでにペリーが年明けの寄港を予告していたため、米国側の態度と幕府の反応を見ながら、自らの言動を試そうとする志士活動と見ることができる。

途中、大阪に到着（十二月三日）し、翌日入京しているが、萩から江戸到着（十二月二十七日）までの間、ごくわずかの書簡しか残していない。この経緯について、福本義亮氏はその著作『吉田松陰詩歌集』のなかで、記事・詩歌がなきに等しい理由を、

長崎敗挙と更に時難愈々急迫し、志業達成のため東上を急げると共に焦心紛情、曰く心緒奔逸し遂に事茲にいたりたるものか。

と類推している。

大阪から兄に宛てた書簡の最後に、

亜墨奴が欧羅を約し来るとも
備のあらば何か恐れん
備とは艦と礮との謂ひならず
吾が敷島の大和魂

と和歌二首を詠み、年初の畿内遊歴とは隔たりの大きい所信を述べている。

続いて、入洛後に父に宛てた書簡（十二月七日・抄）には、

僕は今日迄留京、染川星巌・梅田源次郎（雲浜）・森田謙蔵（節斎）・鵜飼吉佐衛門等を問ひ、明朝出足、関東へ駆付くるの所存なり。

と綴り、兄宛書簡（同日・抄）には、

森田節斎上京、頻りに慷慨在り候。森田は疎豪、策なし、梅田は精密、策あり。但し二人共天下の大計には頗る疎なり。

と記している。この間の行動を推測すると、京都で諸氏に会見し、危急存亡にかかる国事を論争したが、松陰を含めた人たちの間で折り合いがつかなかったようである。その一端を節斎宛書簡（十二月七日・抄）に、

前夜の誨、言々語々、胸に徹し心を衝く。然れども僕が犬馬主を戀ふるの心區々已むなし。ここを以て高誨に従ふ能はざるなり。（中略）僕、死も且つ避けず、何ぞ先生の怒罵を恐れんや。

としている。一死を賭けて行動しようとした松陰に対して、節斎らが時機尚早としたものと判断される。

四　節斎と三山

松陰が節斎や三山からどのような影響を受け、その教えを志士活動に結びつけたかは、『私陰全集』の限りでは史料的に少なく（安政元年以後）、両者への人物評もほとんど書簡に限定されている。

節斎については、先述の様子によると、疎遠となるはずであるが、安政五年（一八五八）には、当時の備後園（広島県）で推敲塾を興していた彼宛に二通の書簡（二月、四月）を送っており、その内容から松下村塾の主宰者松陰と気脈が通じていたと言えよう。逆に、節斎からは、松陰に教えを受けた天野御民によれば、「松下村塾零話」に、

森田節斎翁嘗て曰く、「吾が門下に於て及ばざる者三人あり、吉田寅次郎の膽その一なり」と。

あり、おそらく松陰の下田渡航（用猛第三回）から殉難までの行動を評したものであろう。これらから、お互いに塾主の立場として、認めあう部分があったものと思われる。

節斎の師三山については、安政年間に宛てた書簡はないようだが、『戊午幽室文稿』中に、

三山曰く、「吾れ充耳を以て學を畎畝に講ず、喜ぶ所は諸生相親愛すること、兄弟骨肉の如く然り」

と松下村塾生に示し、有徳の言と賞賛している。三山は私塾興譲館で経学を教授し、尊王攘夷については、道義と気節を第一に門生の士気を鼓舞している。

五　岐路

松陰の人生の転機は、行動面からは前後二度の畿内足跡の間にあり、それは米国艦隊の浦賀入港を契機としたものである。外圧によるわが国の危機が、必然的に松陰の志士活動に影響を与え、自ら敢えて危難に挑むという時務の道を邁進させたのである。以後、「癸丑・甲寅以来」の語句が常套句となる。癸丑年間の東上途中での畿内での足跡は、前後あわせて志士活動を本格化させる端緒となり、極めて意義深いものがある。

財団法人松風会

松風寮のあゆみ

前松風会事務局長
松風会理事　谷口不二彦

奇しき因縁

吉田松陰先生殉節百年記念事業中最重要なものは、山口大学生を入寮させ、松下村塾の故知にならい、松陰精神にあやからせたいと願う精神教育施設松風寮の建設であった。昭和三十六年、県の補助金交付にご尽力いただいた方は、当時県学事広報課長松永祥甫氏（現松風会理事長）であった。また、昭和四十九年、財団法人松風会の認可については、現松風会事務局長であり、当時社会教育課指導主事藤永寿敏氏が担当ご努力いただいた。奇しき因縁を感じる。

松風寮の運営

私は昭和五十四年四月故浅原美橘先生のお奨めで事務長に任命された。他に男一女二の計四人で寮生四十三名の世話に当った。当時職員の処遇改善の方針により、社会保険、労働保険に加入させていただいた。

毎年三月大学合格者発表と同時に入寮希望者の応待に当ったが、大学の平川移転完了で通学距離が遠くなったこと、寮室が四畳半で狭くて古くなったこと、平川地区にりっぱな部屋が数多く建設されたこと等で、入寮者が毎年減少し、三十数名になり経営は非常に苦しくなった。

四月には入寮者の歓迎会を開き全役員が出席し、松風寮の趣旨を話し、入学を祝い飲食を共にした。また寮生全員揃う日に三輪稔夫先生にお願いして松陰先生の話をしていただき、百年記念に作られた映画「吉田松陰」を上映して松陰精神の理解に努力してきた。

市道改修工事に応ずる措置

昭和五十四年、山口市から市道改修工事のため三年後に寮の移転を求められた。理事会では公共事業のためやむを得ないだろうということになった。今後のためにも在寮者名簿を作ることになり、七月から入寮者名簿をもとにいろいろ苦労して翌年二月に完成、元在寮者に発送したが、所在地不明で百通以上も返送された。

寮の移転について寮生にアンケートで希望を調査した。大学の近くよりも街に近く静かな所の希望が多かった。故徳光正亮先生のご案内で椹野川畔を調査、検討したが適地がなかった。それに、松永常務理事が別途依頼されていた概略設計でも、補償金予定額の二倍以上の経費がかかることがわかったので、何回かの会議の末、残念ではあるが寮の経営は断念し、松陰精神の顕揚事業に専念することに決定した。

新教育会館入居まで

昭和五十七年三月廃寮とし、解体して山口市に引き渡す。補償金は前年と三月の二回に分けて受け取り、国債を購入して基金とし、その果実によって今後の運営をすることになる。寮生には移転補償金が市から支払われた。職員は私一人事務局長として残り、他の三人には最優遇措置で退職していただいた。

四月八日、山口大学長から招かれて「永年にわたり本学学生の人間形成及び福利厚生に多大の貢献をされた」という感謝状と記念の時計を贈られた。

新教育会館に入居させてもらうことになり、一部設計変更の後、改造費を負担して、一階の入り口の最もよい位置に決定していただいた。入居直前に事務室と展示室の間に仕切りを入れた。新教育会館入居までの九カ月間は、松永常務理事のご配慮で鳳陽館の一室で仕事をした。

旭村から夏木原に松陰先生の詩碑建立の陳情があった。

十月二十七日松陰神社大祭に全員参拝し、経過報告と共に遺跡の見学もした。展示室に掲げる写真も選定し下瀬さんに注文した。萩までのワゴン車の中で理事会を開き、夏木原も見て建碑のことも決定した。文字は故岸信介先生にお願いした。

松陰神社では先生の遺墨の複製を売っている。展示室に掲げたいと思ったのがきっかけで、私は通信教育の「表装」に入会した。松陰先生の遺墨をふすまの下ばりから発見された表具師の金本さんを訪ね材料をわけてもらったり、技術指導をしてもらったりした。また西村勇さんの手になる拓本などもいただいてパネルを作った。（未完）

(財)松風会設立20周年記念事業

注説脚解　吉田松陰撰集　―人間松陰の生と死―

松陰研究入門書として編集・予約受付中

刊行　平成7年11月　領布特価　6000円　（実費税込）
体裁　A5版上製貼ケース入り　全一冊　約800ページ

松風会は
あたなの松陰研究室
お気軽にどうぞ
〒753 山口市大手町二―一八
山口県教育会館内
☎〇八三九―二二―一二一八